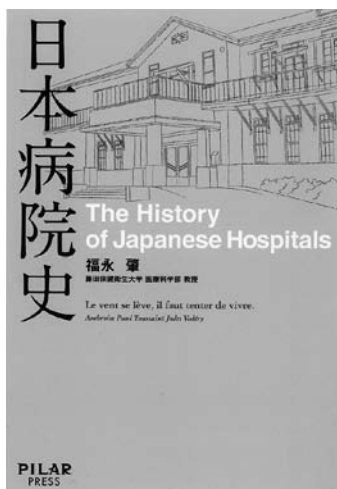




日本の病院の歴史の 大きなうねり

[評者] 武藤 正樹

国際医療福祉大学大学院 医療経営管理分野 教授



『日本病院史』

福永 肇(著)

A5 頁466 2014年

定価:4000円+税

[ISBN 978-4-86194-073-6] ビラールプレス

もともと経済学徒である著者は、経済学を学ぶ上での基本視座は理論、政策、歴史にあるという。この視点で「医療」を振り返るとき欠落していたのが病院の歴史だ。『日本病院史』は、このような著者の問題意識から執筆された。これまで断片的な知識として存在していた我が国の病院の歴史を、時間軸にそって整理して「通史」という体系にまとめた力作だ。本書を通読すると近代日本の病院の歴史の大きなうねりを体感することができる。

さて我が国が近代システムとしての病院を導入したのは長崎の出島である。それ以来、現在に至るまで我が国の病院の歴史はたかだか150年である。パリのオテルデューが1350年以上の歴史を有するのに対して病院後発国、日本の病院の歴史はいかにも短い。しかしその150年は世界的に病院システムが最盛期を迎え、「病院の世紀」といわれた20世紀の真ただ中に位置している。

本書では紙幅の多くを明治以降

に割いている。近代病院の普及は当初、明治新政府の手で行われた。しかし財政難に喘いだ明治新政府はその普及を民間の手に委ねなければならなかった。以来、我が国病院の歴史は民間病院の歴史でもある。そして大正、昭和期にさまざまな経営主体の病院が創られ、それぞれが独自の発展を遂げる。そしてこうした病院も第二次世界大戦で壊滅的な打撃を受けたが、戦後の経済成長と国民皆保険の追い風を受けて、1990(平成2)年にはついに10,000を超えるまでの成功を収める。しかしバブル崩壊後、病院数は減少の一途をたどり現在は8,600ほどだ。

本書はこのような近代日本の病院通史を著者のバランスのよい筆致で扱っている。例えば本書の特徴の一つは、ともすれば忘れがちになる日本が戦前の植民地時代に築いた満州、朝鮮、台湾、南方諸島の医学校や病院の歴史が触れられている点だ。そしてもう一つは戦前の株式会社立病院の地域貢献に触れている点

だ。例えば『風立ちぬ』の作者堀辰夫が療養していた富士見高原療養所もその設立は株式会社立だ。このように地域貢献を果たした株式会社立病院にはひととき興味を覚える。

さて歴史を振り返ることは、歴史を生きた先人たちのビジョンと体験を共有することに他ならない。これは現在を生きるわれわれが次の時代のビジョンをつかみ取ることに役立つ。今まさにわれわれは20世紀に大成功を収めた病院の世紀を経て、次なるモデルを模索中だ。そのモデルは本書でも触れられている「地域包括ケアシステム」に他ならない。地域包括ケアシステムはこれまでの近代資本主義的、製造業的な病院モデルとは全く異質の地域モデルである。それは地域の中のさまざまなステークホルダーが共に価値を共有し価値を創り出す「価値共創モデル」に他ならない。

すこし逆説的だが、本書を通読して、次のポスト病院時代に立ち向かう勇気の片りんを得た気がする。